日本語初級学習者対象のハイフレックス型授業の実践報告

米本和弘（東京医科歯科大学）、今村圭介（東京海洋大学）、佐藤史子（東京医科歯科大学）、福本亜希（東京医科歯科大学）、室田真由見（東京医科歯科大学）

Implementation of the HyFlex model into a beginner-level Japanese course

Kazuhiro YONEMOTO, Tokyo Medical and Dental University　Keisuke IMAMURA, Tokyo University of Marine Science and Technology　Chikako SATO, Tokyo Medical and Dental University　Aki FUKUMOTO, Tokyo Medical and Dental University　Mayumi MUROTA, Tokyo Medical and Dental University

要旨：本稿では東京の大学の大学院留学生を対象とした初級集中日本語コースにおいて行われたハイフレックス型授業の実践を取り上げ、その実践を報告する。学生と教員に対する半構造化インタビューから得られたデータを基に、1）ハイフレックス型授業での言語学習の経験、2）学生の情意的側面への影響、3）教員の授業運営への影響という 3 つのテーマから、ハイフレックス型授業の有効性と課題について評価、考察する。その中で、ハイフレックス型授業を実施する上で考慮が必要となる要素、さらに、今後、検討と改善をすべき点について述べる。

キーワード：ハイフレックス型授業、対面とオンライン、日本語初級学習者、実践報告

1.　実践の背景

ハイフレックス型授業とは、同一の教員が対面で行う授業を、学生は各自の必要性に応じて、対面、もしくはオンラインでの受講を選択できる授業形態である（京都大学, 2020）。コロナ禍を契機として、学習機会の確保を目的に、様々な形態で授業が行われるようになり、それに対応するための環境の整備や必要な技術など情報共有は進みつつある。対面とオンラインが混在する看護学生対象の同期型授業を「探求の共同体」という枠組みから分析した Laforune & Lakha (2019)は、授業の構成や学習を支援する教師の役割という観点で、対面とオンラインの学生では感じ方が異なることを指摘すると同時に、学習の意味づけや深化、他者とのつながり、情意的側面にも、学習内容や授業形態、さらに学習環境が影響している可能性を指摘している。ただ、言語教育に焦点を当てたハイフレックス型授業は実践（プレフューメ，2020 等）もまだ限られており、今後よりよい授業を検討する上で、実践の蓄積とそこから得られた知見の共有が必要不可欠であると言える。そこで、本発表では初級日本語コースで実施したハイフレックス型授業の実践報告を行うとともに、学生と教員の振り返りに基づき、その有効性と課題について評価、考察をすることを目的とする。

2.　実践の概要

2.1　コースの概要

本実践報告では、東京の A 大学の大学院留学生を対象とした初級集中日本語コースを取り上げる。これらの留学生は、学位取得を留学の目的としているが、基本的に英語で学位取得が可能であり、研究等に日本語は必要不可欠ではないことから、生活において必要な日本語を学習し、キャンパス内外での生活をよりよいものとする機会を提供することをコースの目的としている。授業期間は 16 週間で 1 週間に 13 コマ（1 コマ 90 分）あり、7 名の教員がチームティーチングを行なった。教室内では媒介語として英語を使用した。

2.2　実践の流れ

本報告で取り上げる 2019 年 4 月から 10 月にかけてのコースは、4 名の学生が受講し、うち 2 名が、来日の時期がずれたこと等を理由に、授業期間 16 週間のうち最初の 2-3 週間程度、国外（2 名とも日本との時差はマイナス 2 時間）からオンラインで参加した。うち 1 名はコース開始当初からオンライン、もう 1 名はコース開始 2 日目までは対面で授業を受け、一時帰国し、その間、オンラインで参加した。そのため、オンラインが 1 名で対面が 3 名となった時期もあった。

オンラインの学生は、実践時の状況から Skype を使用し授業に参加した。教室にはデスクトップ型パソコン 1 台を置き、パソコン画面にオンライン参加の学生を映すと同時に、内蔵のカメラおよびマイクで教室内の映像と音声を配信した。オンラインの学生とは映像と音声に加えて、メール及び Skype のチャットでコミュニケーションを図った。

コース開始時から、来日時期に関してはある程度見通しが立っていたため、従来から当該コースで使用していた市販の日本語教科書を用い、基本的には対面授業の内容やスケジュール等は変更することなく、オンラインの学生も参加しやすいよう方法を多少修正する形で授業を実施した。具体的には、パソコンの共有画面を使用し板書をしたり、オンラインの学生には授業前に必要な資料を送付したり、活動に合わせオンラインの学生と対面の学生、オンラインの学生同士、対面の学生同士等、ペアを組み替えたりした。

3.　振り返りと考察

ここではオンライン参加だった学生が対面授業に合流した、コース開始約 3 週間後に実施した半構造化インタビューで得られたデータをもとに実践を振り返る。インタビュー調査は、事前に調査に関する承諾を得た上で、学生 4 名（約 30 分の個別インタビュー各 1 回と 4 名でのグループインタビュー1 回）と教員 7 名（約 30 分の個別もしくはグループインタビュー各 2 回）に対し行なった。インタビューでは授業を振り返り、どのような経験をし、どのように感じたかという点に焦点を当てた。その後、全てのデータを書き起こした上で質的に分析した。以下、1）ハイフレックス型授業での言語学習の経験、2）学生の情意的側面への影響、3）教員の授業運営への影響という 3 つのテーマに沿って述べる。

ハイフレックス型授業の実施は、学習機会の保障という観点から学生、教員双方から概ね肯定的に評価されていた。学生は、オンラインで参加している場合であっても、オンラインの学生がいる場合であっても、日本語そのものに関する学びという点においては対面とオンラインでは差異がないことを明示的に述べていた。教員もコミュニケーションの真正性の観点から、オンラインと対面の学生の間で、現実の場を共有していないという違いを効果的に使うことができる可能性を指摘していた。その他、興味深い点として、ハイフレックス型授業により、学生間および学生と教員間の関係性に影響を与えていたことが挙げられる。学生からは、オンラインの学生が加わることにより、教員と学生間に存在しがちな教える／教わるという関係が薄れたことが、そして、教員からは、学生間で積極的に教え合う様子や学生間で非言語的要素も活用する等、工夫しながら伝え合おうとする姿勢が見られたことが指摘された。この点に影響を与えた要因として、データからは、講義形式の授業ではなかったこと、個人の理解度の問題ではなく、インターネット状況により理解が難しいと考えた可能性があることが窺われた。さらに、対面の学生にとっては、オンラインの学生とは異なり、教員と一緒にいるという状況に加えて、1 台のデスクトップを共有することで、学生間および教員との物理的・心理的距離が近くなったことが、オンライン側の学生にとっては、自宅から参加できることにより、心理的負担が軽減されたことが、それぞれの関係性に肯定的な変化をもたらした可能性が教員から指摘された。

上記の通り、特に教員から見た時、オンライン参加の学生がいた場合であっても、学生間で良好な関係性が構築されている様子が印象に残っていることが窺われた。この点に関し、比較的短期間のうちに全ての学生が対面になる見通しがあったことや少人数であったことで、お互いに教えあったり、お互いについて知ろうと思ったりできた可能性が指摘された。ただ、その一方で、対面の学生からは、オンラインの学生との関係性は対面の学生間の関係性と全く異なり、オンラインの学生とは授業内で一緒に練習をしたりする学生という認識にとどまることが指摘された。オンライン参加を経験した学生も同様に、例えば学習内容の理解に問題があった場合でも声を上げにくい状況があったり、即時的なコミュニケーションの難しさに違和感を感じたりといった、学習活動への参加に関しての難しさを指摘していた。加えて、オンラインでは他の学生についての理解を深めることが容易ではないといった他者との関係性構築に関する難しさについても言及していた。そのため、ハイフレックス型授業には上記のように評価できる部分はあるとしながらも、特にオンラインでの学習を経験した 2 名がどちらも対面での授業のほうを好むと明示的に答えていた。このように、他者との関係性という学生の視点に特に影響を与えた要因として、例えば、学習内容とは関係のない雑談や授業時間外の昼食の時間といった活動や、現在の天候や地震、寮の問題といった共通で経験している話題等、現実の「場」を共有していなかったことが挙げられる。

教員も学生と同様、ハイフレックス型の授業でも、日本語そのものの指導は可能であり、授業中、発話者に聞き手の注意がより向く可能性があるといった良さは指摘しつつも、対

面による授業では可能であった点が困難になったことに言及する声が多く聞かれた。それは、例えば、対面では教師の問いかけに対する学生の小さな反応等、理解を把握するための情報が得やすいことや、即座に適切な指摘や訂正ができることといった直接指導に関わるものに加え、雑談を通してのクラスの雰囲気作りや学習についての話題作りといった、上記の関係性構築に関連するものもあった。類似する点として、特にオンラインの学生からは、対面の学生同士で行われている会話が聞こえづらかったり、教室内で教師が提示する資料等が見えづらかったりといった、設備や準備に起因する問題点が指摘された。この点で、対面の学生、オンラインの学生というそれぞれの異なる状況を理解し、異なる対応をしつつも、教員の役割として、二つの集団として見るのではなく、一つの集団として見ることを期待する声が学生から聞かれた。これらの経験から、教員からは、性格といった個人差や学生の人数、対面とオンラインの学生の割合、各学生の日本語のレベル等を考慮しながら、ハイフレックス型授業に適した活動や授業中の対応、教室の座席配置やスクリーン等の設備、学生間の関係性構築における教員の役割等について検討しておく必要性が指摘された。

4. まとめ

本実践からは、対面もしくはオンラインのみとは異なる効果がハイフレックス型授業には期待できる可能性とともに、ハイフレックス型授業を実施する上で考慮が必要となる要素、さらに、検討、改善をすべき点が明らかとなった。特に、授業内では学生間において、表面上は良好な関係性が構築されているような場合であっても、Laforune & Lakha (2019) が指摘しているように、ハイフレックス型授業そのもの、またそれを通して得られるものに対して、対面の学生とオンラインの学生とでは異なる捉え方をしていることが窺われた。この点から、ハイフレックス型授業を実施する上で、本実践で浮かび上がってきた課題をどのように乗り越えていくのか、さらに、本実践のように言語習得のみを目的としない場合、対面という環境でのみ得られる影響についても十分に検討した上で、実践を行う必要性があることが示唆された。

参考文献

京都大学. 「ハイブリッド型授業とは」https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/hybrid.php（2020 年 2 月 4 日参照）

Laforune, A.-M., & Lakhal, S. (2019). Differences in students' perceptions of the community of inquiry in a blended synchronous delivery mode. *Canadian Journal of Learning and Technology*, *45*(3), 1-19.

プレフューメ裕子. 2020. 「テキサス州のベイラー大学における COVID-19 対策とハイフレックス型言語授業の実践」https://youtu.be/VNdrYCrdHkY（2020 年 2 月 4 日参照）